聖　書：創世記 19：1〜22
説教題：ソドムとロト
日　時：2023 年 9 月 17 日（朝拝）

今日の箇所を読む上で頭に入れておくべきは創世記 13 章の話です。アブラハムと甥のロトは所有物が多くて一緒に生活するのが困難になり、別れて生活することになりました。その時、アブラハムはロトにどの地を取るか先に選ばせました。ロトはその時、どうしたでしょうか。13 章 10 節には、ロトが目を上げて見るとヨルダンの低地全体は主がソドムとゴモラを滅ぼされる前だったので、ツォアルに至るまで、主の園のように、またエジプトの地のように、どこもよく潤っていたとありました。そこでロトはその土地を選びました。年長者のアブラハムが先に選ぶ権利を与えてくれたことに恐縮することもなく、ある意味で図々しく自分の好きな方を取りました。そこにロトの人となりが現れていました。すなわち見えるところで判断する。目に慕わしい、この世のきらびやかさに惹かれる。そして他者がそれによって受ける不利益は考えない。このような選択をしたロトはその後どうなったのかがこの 19 章に書かれています。

1 節で二人の御使いは夕暮れにソドムに着きました。この御使いたちは前の章に記されていた通り、ソドムとゴモラが滅ぼし尽くされるべきかどうか最後の調査をするために遣わされた天使たちでした。するとそのソドムの門のところにロトが座っていました。門は当時、人々が集まるところ、社交場でした。そこで裁判が行われ、取引が行われる町の生活の中心地でした。そこにロトがいました。時間が経過して彼はこの町の一員となり、市民権を得ていたことが伺えます。その彼がすぐに二人の旅人を迎え入れました。前の章で見たアブラハムと似ています。ロトもこの時点では二人が御使いであるとは分かっていません。そういう意味で、ヘブル人への手紙 13 章 2 節の次の御言葉はロトにも当てはまります。「旅人をもてなすことを忘れてはいけません。そうすることで、ある人たちは、知らずに御使いたちをもてなしました。」

ロトは二人の御使いに「どうか、このしもべの家に立ち寄り、足を洗って、お泊まりください」と言います。ところが二人の御使いは「いや、私たちは広場に泊まろう」と言います。これはどういうことでしょうか。ある人はこれはロトをテストするためだったのではないか、またある人はロトはいわば妥協した信仰者だったので、彼の家

に泊まることを御使いは快く思わなかったのではないかと言います。しかし別の見方もあります。それは二人の御使いはこの町を調査するために来たのであり、その町の様子を夜に広場に泊まることによって良く確かめようとしたというものです。ロトは自分の家に泊まるようにとしきりに勧めました。それは他の場所は危険であることをよく承知していたからかもしれません。広場で一夜を過ごすなんてとんでもない。ただでは済まない。だから私の家に泊まってくださいとしきりに勧めた。「そして、朝早く旅を続けてください」と言ったのも、町の人々に気づかれない内に彼らを送り出そうとするロトの配慮の現れだったと見ます。そうかもしれません。いずれにせよ、こうして二人の御使いはロトの家に入り、ロトが振る舞ってくれた食事を一緒に食べました。

ところがさっそくこの町の性質が現れて来ます。4 節では彼らが床につかない内に、町中の男たちがやって来てロトの家を取り囲みます。そしてロトに「今夜おまえのところにやって来た、あの男たちを連れ出せ。彼らをよく知りたい」と言います。この「知りたい」という言葉は性的関係を持つことを意味する言葉です。つまりソドムの人たちは二人の旅人を同性愛の対象にしようとしたと考えられます。そのために何と「若い者から年寄りまで」この場に来たと言われています。「すべての人が町の隅々からやって来た」と言われています。いかにソドムが異常に倒錯した町だったかが伺えます。

そんな要求に対してロトは外へ出て行き、人々がしようとしていることをやめさせようとします。彼は後ろの戸を閉めて言いました。「兄弟たちよ、どうか悪いことはしないでください。」　ここで参考になるのはペテロの手紙第二 2 章 7 節でロトが「不道徳な者たちの放縦なふるまいによって悩まされていた正しい人」と言われていることです。また 8 節でこう言われています。「この正しい人は彼らの間に住んでいましたが、不法な行いを見聞きして、日々その正しい心を痛めていたのです。」　彼はソドムの悪の習慣と一体化せず、むしろそれに悩まされ、心を痛めていたという意味で正しい人でした。ここでも町全体に逆らって「悪いことはしないで」と言っています。それは「悪いこと」だと断罪しています。さすがアブラハムとこれまで一緒に歩んで来たロトである、と思います。

ところが続くところを読んで行くと、この町で生活する内にこの町の悪によって大

きな影響を受けていた彼であったことが色々と現れて来ます。以下、4 つの点に注目します。まず一つ目は 8 節です。彼はここでこう言いました。「お願いですから。私には、まだ男を知らない娘が二人います。娘たちをあなたがたのところに連れて来ますから、好きなようにしてください。けれども、あの人たちには何もしないでください。あの人たちは、私の屋根の下に身を寄せたのですから。」　一体これは何でしょうか。果たしてこんな提案は神の前に受け入れられるものでしょうか。ロトとしては何としてでも二人の旅人を守ろうとしたのでしょう。しかしその救いのために別の罪を持って来たのでは何の意味もありません。それでは罪の交換を行っているだけです。ロトは一家の主として、娘たちの安全、家族の安全に当然努めるべきでした。彼はこのギリギリの状況ではこれしかオプションはないと思ったのでしょう。でも祈りはどこに行ったのでしょうか。ここにソドムで暮らす内に色々な点で妥協が生じ、神の基準からかけ離れたことを言うようになっていたロトの姿が露呈されています。人々はこれを聞き入れず、ロトに激しく迫りました。そこで二人の御使いが手を伸ばしてロトを助け、家の中に引き入れます。戸口にいた者たちは目つぶしを食らいました。ロトはここで二人の旅人が特別な存在であることを知ったでしょうか。とんでもない提案をしたロトでしたが、まずはこうして守られました。

　さてこれでソドムのさばきが決定したのでしょう。アブラハムは前の章で 10 人の正しい者がいれば、この町を赦してくださるようにと祈りましたが、10 人もいないことがはっきりしました。そこで御使いはロトに言います。12〜13 節 :「ほかにだれか、ここに身内の者がいますか。あなたの婿や、あなたの息子、娘、またこの町にいる身内の者をみな、この場所から連れ出しなさい。私たちは、この場所を滅ぼそうとしています。彼らの叫びが主の前に大きいので、主はこの町を滅ぼそうと、私たちを遣わされたのです。」　御使いはロトだけではなく、ロトの家族も救い出そうとします。そこで彼は出て行って娘たちを妻にしていた婿たちに言いました。「立って、この場所から出て行きなさい。主がこの町を滅ぼそうとしておられるから。」　しかし彼の婿たちには、それは悪い冗談のように思われたとあります。ここに暗示されていることは何でしょうか。二つ目の点となりますが、それはロトは証しが全然できていなかったということではないでしょうか。世の人は神のさばきが来ると聞くとせせら笑うかもしれません。悪い冗談では？と思うかもしれません。しかしロトが話している相手はロトの家族です。娘との結婚を許した相手です。その人たちがさばきの話を聞いて冗談のようにしか思わなかったということは、ロトはこれまでその話をして来なかったと

いうことなのでしょうか。信仰の話をして来なかったのでしょうか。キリスト教の根本教理について話さなかったのでしょうか。普段からその話をしていれば、こんなあしらわれ方はされなかったと思われます。つまりロト自身、この町で生活する内に、やがて神のさばきが来るという大切な光のもとで生活する緊張感を自ら失い、また身内の者にも伝えていなかったので、いざと言う時にこのような対応しかしてもらえなかったということであったように思われます。

3 つ目は 15 節以降です。夜が明ける頃、御使いはロトをせき立てて言います。「さあ立って、あなたの妻と、ここにいる二人の娘を連れて行きなさい。そうでないと、あなたはこの町の咎のために滅ぼし尽くされてしまいます。」　これに対してロトはどう応答したのでしょうか。何と 16 節に「彼はためらっていた」と記されます。間もなくこの町は滅ぼされます。なぜこの状況でためらっていたのでしょう。それほど彼の心はソドムに縛り付けられ、この町に未練があったということなのでしょう。ここは彼が選んだ町です。住みたいと思って住んだ町です。今や自分の生活の基盤がすべてここにあります。その町を彼は離れたくない、離れられないという気持ちでいたのです。愚図愚図していたら自分もさばかれるのに、です。すると御使いは彼と彼の妻と二人の娘の手をつかんで連れ出してくれました。これはただただ主の憐みによることです。こうしてロトと家族は町の外で一息つくようにさせられました。

その彼らに御使いが言います。17 節 :「いのちがけで逃げなさい。うしろを振り返ってはいけない。この低地のどこにも立ち止まってはならない。山に逃げなさい。そうでないと滅ぼされてしまうから。」　ロトはここでもグダグダ言います。これが 4 つ目の点です。「どうかそんなことになりませんように」と彼は言い、19 節でまず恵みを受けたことを感謝します。ところが「私は山にまで逃げることはできません。おそらく、わざわいが追いついて、私は死ぬでしょう」と言います。これはどういう発言でしょうか。神がすべてを支配しておられるのですから、ロトが従うなら彼が山に着くまで神は守ってくださるはずではないでしょうか。ロトは代わりに「あの小さな町に逃げさせてください」と言い始めます。彼が願った町ツォアルは、22 節の欄外注を見ると「小さい」という意味であることが分かります。また先に参照した 13 章 10 節には、ロトが低地の町を見渡した時、主の園のように、エジプトの地のようによく潤っていたのは、このツォアルに至るまでだったとありました。つまりロトは山に住みたくなかったのではないか。都会志向の彼としては豊かな低地の町のどこかに住みた

い。その中でツォアルは一番小さい町です。小さければソドムのようにさばかれるべき悪も大きくはなく、まだ安全ではないかと彼は考えた。そこで「あそこに逃げさせて」とわがままを述べた、この期に及んでもです。驚くべきことに御使いはこれをも受け入れます。もう一時の猶予もないからでしょう。憐れみをもって「よろしい」と言い、「あなたがあそこに着くまでは、わたしはさばきを行わない」と言ってくれました。こうしてロトがツォアルに着いた後、いよいよソドムとゴモラに対するさばきが下ることとなります。その場面は来週見たいと思います。

今日の箇所を読んで問われることは自分はロトに似ていないだろうかということです。ここにあるのは、この世の豊かさに心が引かれてそちらに吸い寄せられて行き、そこにある様々な悪に心痛めつつも、いつの間にかこの世から大きな影響を受け、大事な時に信仰の歩みができない人の姿ではないでしょうか。私たちは主を信じているならクリスチャンです。私たちの国籍は天にあります。やがて天で祝福にあずかることを望み見て、私たちは今ここで信仰生活を送っています。しかし私たちはこの世の一部も手に入れたいと思うものです。この世でも多く持ちたい。この世の楽しみも知りたい。この世の祝福にもあずかりたい。そうして目に見えるそちらの方の祝福に心奪われ、まだ大丈夫、これくらい大丈夫と深入りして行く内に、ついにはそこから抜け出せないという状態になってしまう。ですからこのような世の力を私たちは警戒しなくては！とロトの姿を見て改めて思います。もちろん私たちはこの世で生活している限り、この世と関係を持ちます。またこの世において正当な楽しみを味わって良いのです。しかしそれは神の御言葉に聞き、それに従うことを第一にするという条件の下ででなければなりません。そのことが後回しになるようでは、何がその人にとって神であるのか分からなくなってしまいます。ここのロトの姿はどうだったでしょう。彼には祈りが見られません。祈るべき時に、祈りが出て来ていません。また御使いを通して主の言葉が与えられても従順に従いません。ロトが御使いを通してどんなに驚くべき憐れみを受けたか、私たちは良く心に留めるべきだと思います。ロトが大変な提案をしてピンチに陥った時、御使いが彼を家の中へ引き入れてくれました。また御使いはロトの身内をも助けようとして、連れ出すようにと言いました。また翌朝になってまだ愚図愚図している彼に、早くこの町を出るようにとせき立てました。それでもなかなか動かない彼の手をつかみ、町の外へ連れ出してくれました。そして山へ逃げなさい！と救いの道を示してくれました。そこでもわがままを言うロトに、よろしいと言って譲歩し、彼がツォアルに着くまで待ちました。信じられないくらいの恵み

によって支えられているロトなのに、もたもたして、すぐに従うという姿勢を見せません。真の敬虔さがありません。神との交わりに生きている者らしい姿がありません。むしろさばかれるべきこの世に心も体も縛り付けられ、自分をコントロールできなくなってしまっている人の姿がここにあるのではないでしょうか。

思い起こされるみことばはローマ人への手紙 12 章 1〜2 節 :「ですから、兄弟たち、私は神のあわれみによって、あなたがたに勧めます。あなたがたのからだを、神に喜ばれる、聖なる生きたささげ物として献げなさい。それこそ、あなたがたにふさわしい礼拝です。この世と調子を合わせてはいけません。むしろ、心を新たにすることで、自分を変えていただきなさい。そうすれば、神のみこころは何か、すなわち、何が良いことで、神に喜ばれ、完全であるのかを見分けるようになります。」　自分を神にささげる礼拝生活を第一とし、この世と調子を合わせる生き方をしないこと。むしろ神の御心を見分けて、それを選び取る歩みをすべきこと。この道を私たちは進むべきであることを思わされます。もう一つはヨハネの手紙第一 2 章 17 節 :「世と、世の欲は過ぎ去ります。しかし、神のみこころを行う者は永遠に生き続けます。」　やがて過ぎ去るこの世限りのことに心を用い過ぎてはなりません。それらはやがて滅び去ります。私たちは滅び去るもののために自分の貴重な時間とエネルギーの多くをささげて献身するのでしょうか。そしてやがて空しい結果を刈り取るのでしょうか。それともいつまでも続くもののために献身するのでしょうか。

見えるところに従い、世の繁栄を求めたロトの歩みはどこへ行きついたのか、来週の箇所で見ることになります。それを見る時、神の約束の御言葉にこそ信頼し、従ったアブラハムが逆に何と豊かなものを得て行ったかを思わされます。自分を点検し、もしロトに似ているところがあるなら、正しい道に引き返す者でありたいと思います。この世に引き付けられ、それを追い求めることが優先するなら、取り返しのつかない影響を受け、最後は空しく終わります。そうではなく、主の御言葉とその約束に信頼し、主に祈り、主との交わりの中で主に従い、そういう者に備えられている真の祝福にあずからせていただく者へと導かれてまいりたく思います。